



「自分探究学」



現在の自分を見つめ、未来の自分を切り拓く

Nagasaki Global Junior Innovators

- | | | | |
|------|-------|---|---------------------------|
| 高校2年 | 窄 那明 | ➔ | P6-P9「問題点-分析-提案」、リーダー |
| 高校1年 | 相庭 和花 | ➔ | P4-P5「調べ学習」、書記 |
| 中学3年 | 斎藤 優輝 | ➔ | P1、P5、P9「可能性と課題」、P10「最後に」 |
| 中学2年 | 佐藤 愛莉 | ➔ | P3「取材調査」、インタビュアー |
| 小学6年 | 相庭 唯人 | ➔ | P1-2 アンケート実施、アンケート集計 |

はじめに



僕が行っている学校では、体育が週 3 時間ある。しかも内容がなかなかハードだ。いつも授業を受けている時に僕は思う。「なんでこんなに体育をしなきゃなんだ！正直、勉強の方が柔道や剣道よりも絶対将来使うだろうに。体育なんていらぬよ！」と。特に今の季節は、ものすごく暑くて汗をかくから余計に疲れるし、コロナが収まってきたから去年までやっていなかったことが始まり、今までよりも結構きつい。

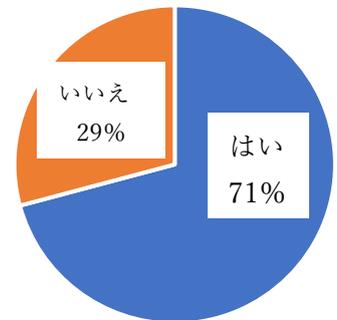
今回このテーマについて考えたとき、「そうだ、体育よりも将来のために役に立つ力がきつとあるはずだ」と、僕は強く思った。このことをチームの話し合いで言ったら「確かにこれ必要なのかなと思う授業ってあるよね。けど、将来のために役に立つ力ってどんな力なのだろう。それに、その力を身に着けていれば、私たちはほんとうに将来困らないのかな」という話になった。21 世紀型スキルって言葉は聞いたことがあるけど、正直どんなスキルでどうやって身に着けるのかといったことは何も知らない。同年代のみんなも同じ疑問を抱いているのかな？そもそも将来についてちゃんと考えているのかな？みんなに聞いてみよう！これはもうアンケート調査しかない！

アンケート調査

そういうわけで、僕たちは小中高生 120 人にアンケート調査を実施した。

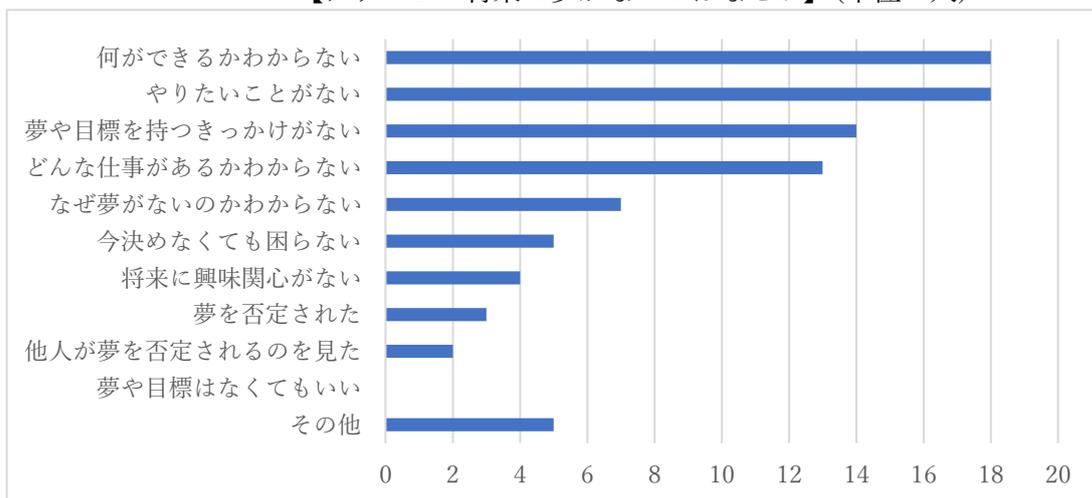
【将来の夢、目標について】

「将来こんな仕事をしてみたい、こんな人になりたいなどの夢や目標がありますか？」という問いに、71%の人が「はい」と回答。「ない」と回答した人の主な理由は、「自分に何ができるかわからない」「特にやりたいことがない」が一番多く、次に「きっかけがない」「どんな仕事があるかわからない」が多かった。夢や目標が現在ない人でも「夢や目標はなくてもいい」と考えているわけではないことに安心した。また、「夢や目標を否定された」ことがあるのには悲しい気持ちになった。



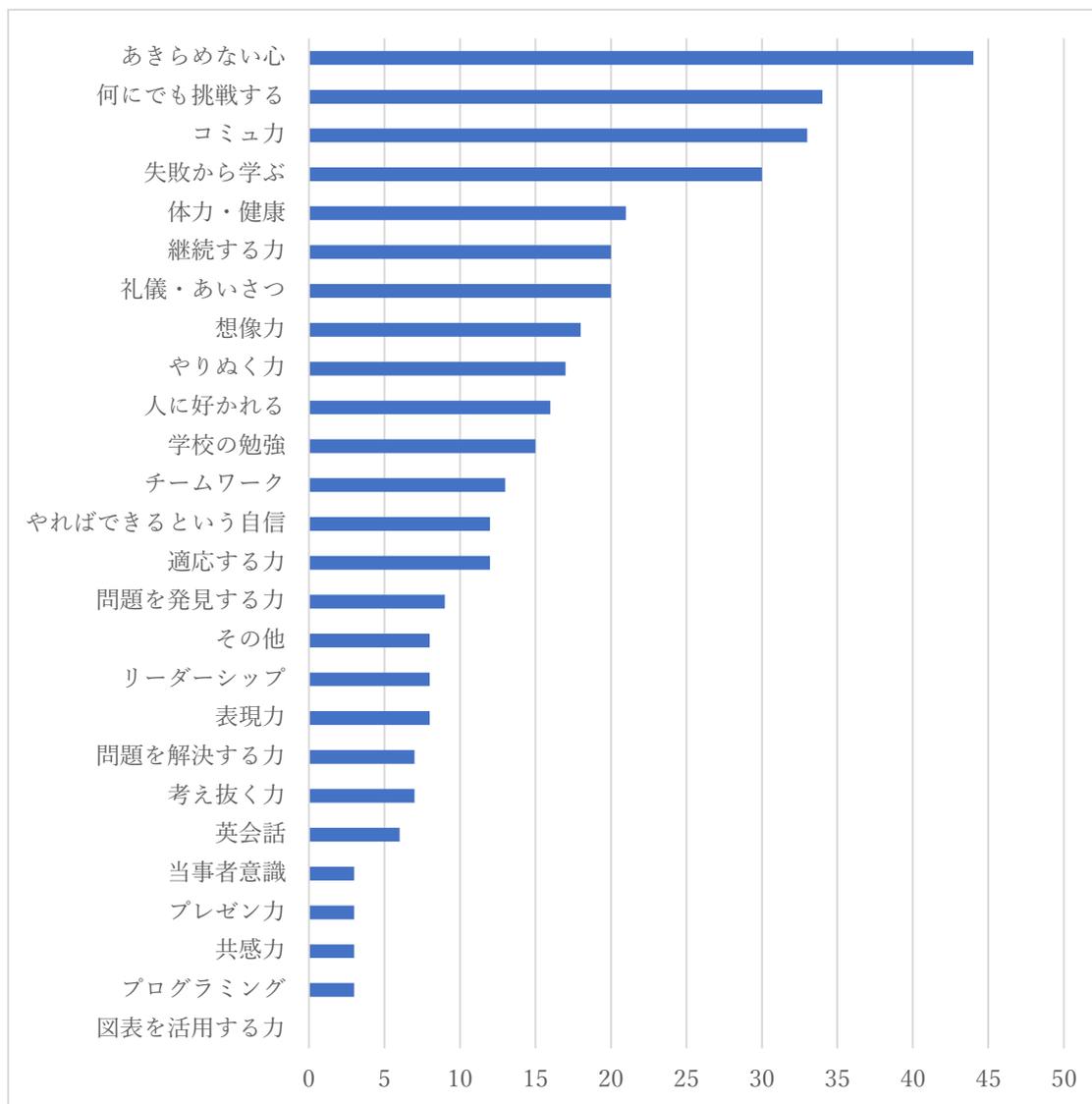
【グラフ 1：将来の夢があるか】

【グラフ 2：将来の夢がないのはなぜか】（単位：人）



【目標達成のために何が必要か】

「夢を実現したり、目標を達成したりするにはどんな力、スキル、考え方が必要だとおもいますか？」という問いに、小・中・高校生全体で「あきらめない心」が圧倒的に多かった。その次に「なんにでも挑戦する」「失敗から学ぶ」といった意見が多く、全体としては、「英会話」や「プログラミング」「プレゼン力」などのスキルよりも、科目として学びにくい「考え方」「心構え」の方を重要視していることがわかった。



取材調査

私たちは今回、話し合いやアンケート結果をもとに、疑問に思ったことを長崎県庁義務教育課の鶴田さんに取材をしてきた。



質問.1

相庭) 学校で学ぶ教科や時間割は誰が決めているのですか。

鶴田さん) 文部科学省が定めている『**学校指導要領**』に沿って決めています。

教科別に行わなければならない時間が決まっており、すべての教科で**年間 35 週以上**になるように組んでいます。

質問.2

佐藤) 最近では、授業中にパソコンを使用して調べ学習を行ったり、隣の人と授業内容について話し合ったりしています。大人からは「昔とは学び方が違う」とよく言われます。学び方はどのようにして決まっているのでしょうか。また、以前の学び方は間違っていたのでしょうか。

鶴田さん) 以前と学び方が変わっているのは、**社会背景**に影響を受けています。社会背景の変化により授業改善・入試のやり方も年々進化してきました。パソコンを使用する機会が増えているのは、自分たちで必要な情報を手に入れる**情報活用能力**を学ばされることで、今の大人たちと同じようなことをさせ、社会に出たときに適応できる力を身につけさせています。

質問.3

齋藤) 私たちが未来を生きていくために必要な力や身に着けるべきスキルは何でしょうか。

鶴田さん) 価値観が多様化している社会において、全員が同じ内容を速く・正確に学ぶような一斉授業だけでは、今後生きていくのに対応することができません。※Society5.0 社会に生きていく私たちには情報を集め、読解し、必要性のない情報を処理することができるスキルが必要となってきます。そして、**“主体的” “対話的”**の学びが大切となってきます。

※Society5.0…仮想空間と現実空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会のこと。

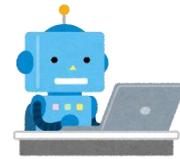
調べ学習－現在考えられている未来－

私たちは鶴田さんにお話を伺った後、教育方法は社会背景に影響を受けているというお話から、現在考えられている未来の社会について調べることにした。その結果、私たちが仕事をしていく上で大きく影響するものは主に以下の4つだと考えられる。

1. Society5.0

AIやIoT(Internet of Thing)などの最新テクノロジーを産業や社会生活に取り入れ、経済発展と社会的問題を解決する未来。

⇒深刻な人手不足などを解消したり、幅広いニーズに対応する暮らしやすい社会を実現したりする一方で、豊富すぎる情報から本当に必要で正しい情報を見つけることが難しいなどの課題も考えられる。



2. AIの導入率が上がる

今後10年～20年後にはAIによって49%の仕事がなくなってしまう。

【なくなる可能性が高い職業の特徴】

単純なデスクワークの仕事⇒一般事務員など、機械操作がメインの仕事⇒電車運転士など、ルーティンワークを行う仕事⇒警備員など、AIによる代替確率の高い仕事。

⇒私たちが生きる予測不能な新しい未来。今なりたいと思っている仕事がなくなっている可能性が高いがその分新しい仕事ができることを考えると、どのようなスキルが必要になるのだろう。

3. 外国人労働者の雇用、海外への外注の増加

⇒安い費用で労働力を確保することができ、人材不足を解決できる。最近コンビニの店員さんが外国人であるのを多く見かける。現実として起きる実感がある。

4. 転職回数の増加

現在の転職回数は40代で平均3～4回。

⇒就いた仕事なくなるかもしれないし、一生1つの仕事だけ続けることは考えにくくなる。移り変わる社会や新しい仕事に対応する力が求められる。



このように予測されたさまざまな未来に対応するため、国や大人たちはどのような力が必要だと考えているのか調べた。文部科学省や経済産業省、大学などは以下のような提案を示している。

1. 文部科学省/2011年 「21世紀型スキル」⇒「基礎」「思考」「実践」
創造力、コミュニケーション能力、情報リテラシーなど働くためのツール活用術
2. 経済産業省/2006年 「社会人基礎力」⇒「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」
職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力
3. オックスフォード大学マイケル・オズボーン教授/2013年「戦略的学習力」
⇒新しいことを学ぶ際に使用される能力であり、2030年に最も必要になるスキルであるといわれている。

調べ学習を終えて

私たちは調べてみて、大人はこれからの未来を見据えて私たちが学ぶべきこと、身に着けるべきスキルや力を設計してくれているし、考えてもくれている。私たちがこれ以上新しい科目、学び方を考える必要はないのではないか、今あるもので十分移り変わる社会に適応し生きていけるのではないかと、そう思った。

不安－僕たち、私たちの本音－

「基礎力」「思考力」「実践力」「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」大人はこれからの世界で生きていくために、こんな力を身に付けようというが、それらを身に着けた僕たちは、本当にこれから先の未来を生きていくことができるのだろうか。鶴田さんが取材の中で教えてくださった現在の教育指導要領はあくまで 2030 年までを想定して作られたものだ。しかしそれから先は？当然それから先も教育指導要領は改訂され、僕たちが習わなかったものを未来の世代は習ったりするだろう。そうなれば、さらに社会全体も変わっていく。僕たちは 2030 年までの教育指導要領で身に着けた力で、それから先 2030 年以降のそういった変化を続ける社会を生きていかなければならない。果たして僕たちはそういった社会の変化についていけるのだろうか…



「失敗を恐れなくて何でもやってみよう」「困ったときは他人と協力してやり遂げよう」大人は子供にこういったことを言う。僕たちだって大人が言いたいことはよくわかる。でも、いざやろうと思ったときに僕にはそれができると自信が持てない。それにみんなができていても自分だけはできないんじゃないかと思ってしまう傾向があるようだ。



2013年にOECD（経済協力開発機構）が実施した意識調査にもその傾向が出ている。この調査は日本を含めた7カ国の満13～29歳の若者を対象としたものだ。「自分自身に満足している」「自分には長所がある」「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」「社会現象が変えられるかもしれない」「将来への希望」「40歳になった時のイメージ（幸せになっている）」といった問いに対し、日本は諸外国の中でいずれも最下位である。だが、「自国のために役立つようなことをしたい」という問いには、諸外国の中で堂々の1位だ。僕たちは、自分たちの幸せよりも他人の幸せを優先的に大切にしようとするのだろうか。誰かの役に立てることが幸せなことなのだろうか。自分が幸せだと感じる、自分にはできると感じるために必要なものって何なのだろう。

見えてきた問題点

日本では、自国のために役に立ちたいと思っているけど、社会現象を変えられるとは思えない人が多い。それ以前に、自分に対する自信や将来への希望が持てず、幸せになれるとなかなか思えていないことが分かった。実際、私たち 5 人の中でも、将来の夢が決まっているのはたったの一人だった。他の 4 人も何かしらの仕事をしたいし、人の役に立ちたいと思うけれど、なかなか決められない。今までだって何度も学校の授業や進路のことで自分の将来を考えてきたけど、正直面倒くさかったし、嫌いな時間だった。その理由は僕たちが僕たち自身のことをよく分かっていないからだ。自分には何ができるのか、自分に何が向いているのか、そもそも何がやりたいのか、そんなこともわからない。だから、好きなことや得意なことを聞かれたり、自分の目標や理想を聞かれたりすると、答えられず悩んでしまう。

今回レポートに取り組む中でも、みんなと将来何をしたいかとか、どんな人間になりたいかなど、話し合ってみたけど、「自分の考え」が分からないから、活発な意見交換ができなかった。自分の意見や考えを言えなかったりすると、「自己表現は難しいよね」って言われる。だけど、問題はそこではない。むしろ「伝えられない・言葉にできない」ことではなくて、そもそも伝える「考え・意見がない」ところにあるのだ。



問題点を分析

問題点は「自分自身をよく知らないために、自分の未来について考えや意見を持つことができない」ことだと考えた。しかし、なぜ自分自身のことなのに、長所や好きなもの、やりたいことがわからないのだろう。

「自分探し」という言葉を聞いたことがある。自分探しをするために、旅に出るらしい。彼らはなぜ自分を探すために、わざわざ休みを取って、今まで行ったことがない土地や知り合いのいない土地へ出かけていくのだろう。僕たちは、それは「自分自身とじっくり向き合う時間をつくるためだ」と考えた。日常から離れ、1人であらゆることに挑戦するとき、自分の得意なものや好きなことに気づくことができるのではないだろうか。

僕たちの日常はどうしても、家、学校、塾に限られてしまう。パターン化されてしまった毎日を繰り返すだけで、新しい人に出会うこともなく、社会のために活躍することもない。朝早く家を出て学校へ行き、部活が終わって夜遅く帰宅する。帰宅後は食事、入浴、宿題、課題、そして眠るだけだ。毎日が忙しい。このような日常では何の刺激もなく、何かについて考えるきっかけも、考える時間さえもない。このような日常の中で自分についてよくわからないのは当然のことだろう。

また、限られた生活の中では、先生、友達、家族のように出会う人も限られてしまう。仕事という行為の目的、その先には必ず人がいる。僕たちは漠然と国や誰かのためになること、役に立つことをしたいと思っているけど、その相手である人を知らずにその行為は成り立つだろうか。社会にどんな人がいるかも知らずに、何に困っているかも知らないままでは、どんな人の役に立てるか、本当に役に立てるのか、どんな風に役に立てるのがわからない。だから、やりたいことが定まらなくなる。教科書で知るのには限界がある。

このように、「自分の意見が持てない」原因は経験の少なさにあると言える。経験がないため、実際何かに直面したとき、自分がどのように感じ、考えるのか、自分はどのように役に立ちたいと思うのかなどを総合した「価値観」が分からない。そのため、意見を持つことができず、自分に自信を持つことができず、調査で明らかになった現状が生まれたのではないだろうか。

問題解決のポイント

① あらゆる分野の経験をする

- ・1つの分野だけの経験で、できるかできないかだけを考え、自分を評価するのはおかしい。
できるなら、より良い結果を得るにはどうしたらよいのか工夫をしたり、自分のどのような点が良くてできたのか分析したりする。できないならできないで、どこまでできてどこからできなかったのか、改善するためにはどんなスキルや気持ちを育て身に着けるべきなのかを考える。
- ・1つの分野の社会課題だけを知っていても解決策を見つけることはできない。あらゆる分野を知ることで、多角的な視点で協力して解決に取り組むことができる。

② あらゆる分野の人に出会う

- ・その分野に長く取り組んだ人たちに話を聞く
まず、相手がどんな人かを知るために、取り組むきっかけや苦労した点、工夫した点などを聞く。苦手だったものが意外と得意になったなどの話は刺激になるし、自分と似ている点や異なる点などから新たなヒントを得ることができるようになったりする。
- ・当事者意識を持つ
実際に話を聞いて自分と同じような悩みがあることに気づくことができ、一緒に解決にしたいと思えるようになる。

③ ①、②から自分を振り返る

- ・自己評価をする。成績は「できる・できない」を他人と比べて評価される。しかし、自分のことを「自分なりにできた」や「できなかったけど自分のことがよくわかってよかった」など自己評価することで、自分の考えをよりよく知ることができる。
- ・記録をする。自分の変化・成長を記録することで、自分の考え方の違いやできるようになったことを振り返れば、自分への理解と自信を深めることができる。また、足りない部分、強化すべきところ、伸ばすべきところを知ることができる。
- ・発表をする。学校の授業は「聞く」ことが多い。自分が得た経験をもとに考えたことを踏まえ、自分の意見として他者に伝える経験をつくる。
- ・フィードバックを他者からもらう。対話することで、よりよい解決策を作り上げていく。
人の意見を否定せず、他者と自分との違いを認め、理解する。自分の意見が認められる経験ができることや未来で活躍する姿を想像することができるようになる。

提案－「自分探究学」 現在の自分を見つめ、未来の自分を切り拓く

これまで考えてきたことを踏まえて、普段では味わえない経験をし、関わりがない人たちとの関わりの中で自分の価値観や考えを深めていき、自分なりの意見を生み出す、そんな授業が必要だと僕たちは考えた。では、実際にどのような授業にしたらよいだろうか。僕たちが提案する授業は「自分探究学」である。その一例としてまずは農業に関わる時間を紹介する。

【小学校での授業内容】

- ・地元の農家協力のもと、実際の農家の生活を体験する。
- ・農家から高齢化により管理しきれない土地を借りる。
- ・そこで農家の方に色々なことを教えてもらい、4～5人の班に分かれて実際に育ててみる。
- ・植えるところから収穫まで月に1～2回程度の頻度で農園に行き、作物がどう育つかなどの観察を行う。
- ・育てるものによって糖度や実の大きさなどで目標を設けて、班ごとに先生や農家の人に教えてもらい育てるプランを作る。
- ・毎授業の最後に「積極的に取り組めたか」「次作物がどのようになっているかの予想」「次回挑戦してみたいこと」「農家さんと話すことができたか」などを振り返りワークシートに記入し、次回に生かす。



得られる経験

- ・目標をもって野菜作りに取り組むことができ、農家の生活の大変さややりがい(一年を通して体験するため夏と冬の仕事の違いや、もし台風や野生動物などで被害に遭い作物が育てられなくても、6年生までであるので問題ないし、実際の現場で起こることを経験できるなど)を学ぶことができる。それによって農家の視点から課題が見えてくる
- ・農薬を使った際の作物へのメリット、デメリットを教えてもらうことができ、最後には育てた作物を自分たちで食べるができる。育てているものだけでなく自分自身の行動の評価や思ったことを記録したり、設定した目標に対して班員同士、班同士で意見交換して共有、改善をしたりする。

【中学校での授業内容】

- ・小学校の続きで出荷作業や一次加工を体験していく。
 - ・出荷規格外になってしまったものや、小学校で採れたものを使い、二次加工、三次加工していく。また、必要な原材料は、近くの八百屋やスーパーで味や健康に影響はないが値段が安くなってしまったものなどを購入する。
 - ・最後に、実践したことや課題の解決についてプレゼンをする。
- *一次加工…食べ物を長期保存できるように加工すること
- *二次加工…一次加工食品を1～2種類以上使って食品に何らかの加工をすること
- *三次加工…一次加工食品もしくは二次加工食品を2種以上組み合わせて、在来のものと異なる形に加工すること



得られる経験

- ・小学生の時に学んだことに加え加工作業や、食品ロスの削減などに取り組める。
- ・農家・スーパーや八百屋などの人たちとかかわりを持つから新たな視点が加わり、別の視点からの農家の人たちが抱えている課題に気づくことができる。社会課題に対して、自分にできたこと、できること、これからしていきたいことを考える

【高校での授業内容】

- ・高校では企業に協力してもらい、自分たちが収穫したものを商品にすることを学ぶ。消費者のニーズを調査しどうすれば売上を上げることができるかを考え、工夫する。商品のデザイナーやコンセプトを考える人などに役割分担して完成させる。
- ・最後に自分たちの商品や協力して下さった農家のPR動画をつくり、不特定多数の目に触れるところで流してもらい宣伝する。



得られる経験

- ・役割分担してチームで働くことにより、チームワークの重要性を学べ、宣伝の仕方などを学ぶことができる。
- ・最終的には「農家」「スーパーや八百屋の人たち」「商品開発に携わる人」「消費者」すべての立場になって考え、視野をさらに広く持つことができるのでそれぞれの問題点を見つけることができるようになると同時に、今まで関わってきた人の意見や気持ちを取り入れることができる。
- ・販売する商品にアンケートのQRコードをつけておき、それを読み取って答えてもらい、消費者の評価・意見をきく。それをもとにチームの仲間またはチーム同士で話し合いのなかで共有し、商品をより良いものへと改善する。

「自分探究学」の可能性と課題



自分探究学は「現在の自分を見つめ、未来の自分を切り拓く」ことが目的だ。今回は農業の時間を紹介したが、クラスや学年によって分かれ、林業や漁業、工業やサービス業を体験する時間も設ける。

田畑で作物を育てれば、虫や動物によって田畑が荒らされることもあり、近くの山の管理が気になるだろう。長崎では放置された竹林が問題になっている。そうであれば、安全を確保した上で竹林の整備を手伝うことで、林業の一部に触れることができる。伐採した竹は、簡単に加工して煮炊き用の調理器具にしたり、粉碎して土壌の改良に使ったりできる。乾燥させて火をつける燃料にすれば、燃えた後の灰を畑の肥料としてまくこともできる。海で魚を釣る授業があれば、海洋ゴミの問題にすぐに気づくだろう。そうすれば、こんな海で育つ魚を食べたくない、ゴミ拾いを始めるはずだ。すると、そのゴミが陸から来ていることに気づく。見上げれば、近くの山にゴミがたくさん捨てられている。その山に降り注ぐ雨が田畑や海に流れ込む。海を守るためには、山も守らなければならない。すべての分野が密接につながっていることを学ぶことができる。

また、これらを体験する中で、学校での学びがどれだけ必要であるかを感じることができる。国語、数学、理科、社会だけでない。技術や家庭科、美術や体育などの実技科目も生きてくる。僕たちは今日も1日、学校の授業で一度も声を出すことはなかった。体を動かし、手を動かし、学びを実践する。うまくいかない自分、意外とうまくいく自分に出会い、いろいろな思いが浮かんでくるはずだ。それを小学生から高校生まで、長期的、継続的に行っていく。そのような経験の中で、どんな未来が来ても、最後までやり抜ける僕たちになれるはずだ。

もちろん、解決しなければならない課題もある。時間数と教員の確保がまず考えられる。今の学校の時間割の中に新しい科目を入れるのは難しいことはわかる。しかし、自分探究学は、いわば全科目の実践の場だ。全科目の先生と一緒に参加して、自分探究学の時間に全科目を実施してみてもどうだろうか。また、学校外に出るといことで、安全性の確保も課題になる。地域の人たちにもお願いして、僕たちが安心して集中できる環境づくりに協力してもらわなければならないだろう。課題は多くあるが、実現できたらと考えるだけでわくわくしてくる。大人になったら、僕たちもしっかりと協力していきたい。

最後に

今回レポートに取り組んでいるとき、僕たちは何度も何度も壁にぶつかって、そのたびにみんなで悩んだ。めまぐるしく変化を続ける時代にあった教科を考え、提案する。この誰にも予想ができないことを考えるのは、今の時代を生きる僕たちにとってとても難しかった。「どうやったらこれを解決できるだろう。」「どんな教科にしたらみんなは将来必要な力を身に付けられるのだろう。」自問自答を繰り返し、話し合いに話し合いを重ね、ともにその壁を乗り越えた。そんなことをしている中で感じたことがある。大人たちは僕たちのために、こんなにも難しいことを考えてくれていたのか。今回のことを始めるまでは、教科に愚痴をこぼし、なんでこんなことをしなければならぬかと思っていた。でもそれは僕たちに必要な力を身に付けてもらうため、決して無駄なことではなかったのだ。今までもあらゆるテーマに当事者意識を持って取り組んできたつもりだったが、今回はより当事者の気持ちや苦労などが身にしみてわかったと同時に、大人たちに対する感謝の気持ちがあふれてきた。

この社会が変化しているのは多様化の影響だ。多様化が進んでいくにつれ、人々の選択の幅が広がり、様々なものが受け入れられる時代になっていく。そのような社会で生きていくために必要な力やスキルなんてものは誰にもわからないし、決まっていない。では僕たちはどうしたらいいのか？その答えも多様化だ。決まっていないからその答えを追い求める、そして自分なりの答えを自力で見つけ、社会で自分らしく生きていく。自分を信じて生きていくという考え方が大切だ。

鶴田さんも取材でおっしゃっていた。「これからの社会を生きていくためには【やればできる】【がんばったらできる】という考え方を持つことが大切です。」「自分で自分なりの根拠を持って、探究し、力を身に付けていってくださいね」

未来の社会の流れに合わせて生きていくのではなく、自分らしくその時代を生きていく。そういった生き方ができる社会になるように、どんなことにも積極的に取り組み、失敗してもポジティブな方向に考える。そんな生き方を今のうちからしていき、未来の社会を自分らしく生きていける社会にしたい。



【出典・参考文献】

Society5.0 とは？社会課題と経済発展を解決する超スマート社会への取組事例

<https://www.nikken-totalsourcing.jp/business/tsunagu/column/987/>

将来なくなる仕事ランキング！10年後になくなる仕事とは？今後なくなる前の対策とは？

<https://www.ncxx.co.jp/career/ranking-of-jobs-that-will-disappear-in-the-future/>

今を生きる若者の意識～国際比較からみえてくるもの～ | 平成26年版子ども・若者白書（概要版） - 内閣府

<https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26gaiyou/tokushu.html>